

四月にスタートしたこの会は、年内に予定通り5回の例会を重ねることができました。参加会員の熱意のたまものです。前回までに、後醍醐天皇の隠岐配流迄を読み終わり、幕府の暗愚な政治の裏で、日夜大塔宮を中心とした討幕派の地下工作が進むくだけりにかかりました。来年から毎月開催はどうかという声も。

◇この日輪読した第五巻の箇所は次の通りです。

(四) 相模入道田楽を好む事

得宗高時を囲む天狗の舞 (p240～243)

時の北条氏嫡家得宗の高時は田楽を好み、その演舞の見物に明け暮れた。ある夜、侍女が部屋を覗くと、舞っていたのは天狗の一群。「天王寺の妖霊星を見ばや」と囁し立てている。儒者は「天王寺辺より天下の動乱が始まる予兆ではないか」と占った。

※天狗の姿 太平記はこの時田楽を舞っていた天狗を「或いは、嘴勾りて鳶の如くなるもあり、或いは身に翅あつて頭は山伏の如くなるもあり」と記す。この時代の天狗は、翼を持ち、顔は鳶のように描かれるのが普通で、鼻高天狗が登場するのは室町時代後半から(大和岩雄「天狗と天皇」という)。

(五) 犬の事

鬪犬に耽る高時 (p243～245)

高時は、庭で犬が喰い合っているのを見て、鬪犬に興味を抱く。全国から猛犬を鎌倉に集め、月に十二度の犬合わせ(鬪犬)の日を定めて、一族の武将らとともに、犬の喰い合いを見物した。これもやがて訪れる「鬪諍死亡」の世の前兆と、太平記は見ている。

※犬と武士社会 犬を追いかけて馬上から射る「犬追物」は、流鏑馬、笠懸とともに「騎射三物」と呼ばれ、武芸鍛錬の重要な種目であった。後二者的が動かぬのに対し、犬追物は走り回る犬を射るだけにより実践的で、鎌倉、室町時代の武家社会に大流行した。足利尊氏も三条河原に犬射馬場を造成し、三百余匹の犬を集めて犬追物を実施したと、ある貴族が日記に書き留めている。しかし、高時が耽溺した鬪犬は当時にはあまり例がなく、盛んになるのは幕末ころからだという(谷口研吾「犬の日本史」)。

※北条高時の人物評 高時を暗愚な指導者だったとする記述は、太平記以外にも数多い。「頗る亡気の躰にて、將軍家の執権も叶難かりけり」(保暦間記)。「う

つつなくて朝夕好む事としては犬くひ、田楽などをぞ愛しける」(増鏡)。得宗を補佐する内管領の専横と腐敗も目に余るものがあつた。このころ幕府は蝦夷の反乱に手を焼いていた。それも、時の内管領・長崎高資が、現地を取り締まる安東氏の内紛で、双方から賄賂を取って適切な対処を怠つたのが一因という。

(七) 大塔宮大般若の櫃に入り替わる事

般若寺で危機一髪 (p247～250)

笠置山から姿をくらし、奈良坂の般若寺に潜んだ大塔宮は、興福寺一乘院の僧兵の搜索を受ける。大般若経の唐櫃に巧みに身を隠し、危機一髪で難を逃れ、神仏の加護に感涙した。

※般若寺と倒幕派

後醍醐天皇周辺の倒幕工作が暴露する少し前の元亨4年(1324)に造立された般若寺の本尊・文殊菩薩騎獅像には、後醍醐天皇の護持僧・文観と六波羅引付頭人・伊賀兼光が天皇の所願成就のためにこの像の造立を主導したと読める墨書銘がある。天皇籠城中の笠置山に、般若寺僧が祈祷の数報告に訪れ、戦闘にも加わつたと太平記にあり、この寺は奈良における討幕派の拠点だったらしい。

(八) 大塔の宮十津川御入の事

(九) 玉木庄司宮を討ち奉らんと欲する事

(十) 野長瀬六郎宮御迎への事

十津川彷徨を経て吉野へ (p252～259、

p262～265、p270～272)

大塔宮は熊野を目指す、熊野三山別当の定遍僧都が武家方で果たせず、定遍配下の土豪らに妨げられながら十津川地域を転々、戸野兵衛、竹原八郎、野長瀬六郎の助けで吉野に入った。竹原八郎は、大塔宮の令旨を帯びて、伊勢で守護方を襲つたことが、後醍醐の先代花園天皇の日記にあり、実在が確認できる。

第7巻輪読予定ページ (4月15日)

- 1) 321 元弘3年～324 平地になる。
- 2) 324 さる程に～329 給ひける。
- 3) 332 この城～335 浅からね。
- 4) 335 されば、城～337 終てにけり。
- 5) 341 軍もなく～344 失せにけり。
- 6) 344 上野国の～348 下られける。
- 7) 349 さる程に～352 告げたりける。
- 8) 352 畿内の軍～355 頭しける。
- 9) 355 主上、今は～357 なかりけり。
- 10) 357 夜も～360 着きにけり。
- 11) 360 六条～363 おびたたし。
- 12) 363 さる程～367 なかりけり。